

機関番号：14401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520126

研究課題名 (和文)

近代日本における西洋音楽の変容に関する研究—民俗芸能としてのラッパ文化—

研究課題名 (英文)

The Acculturation of Western Music in Modern Japan: A Study on the Bugle as Folk Culture

研究代表者

奥中 康人 (OKUNAKA YASUTO)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：10448722

研究成果の概要 (和文)：

19 世紀後半の日本に流入した西洋楽器のラッパ (Bugle) が、静岡県 (浜松市) と長野県では祭礼行事として結びつき、現在ではもはや民俗楽器であるかのように定着している実態について、資料調査およびフィールドワークをおこない、今に至る歴史的・社会的背景を明らかにした。さらに、従来の音楽研究が、そうした動態的な新しい民俗芸能の発展を間接的に阻害していることについて考察をした。

研究成果の概要 (英文)：

Bugle came into Japan as Western instrument in the late 19th century, and combined with the festival event. Now it has settled in as if they were folk music instrument. I investigated bugle culture in Nagano and Shizuoka Prefecture. Consequently, I was able to clarify the social and historical background of both cases. In addition, I discussed the relationship between these new folk music and musicology.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学

1. 研究開始当初の背景

概していうと、従来の日本の音楽文化を扱う研究は、たとえば伝統的音楽を扱う「日本音楽」の研究も、明治期以降にはいつてきた「西洋音楽」研究も、それぞれ「日本」や「西洋」という地理条件によって研究対象が規定されるため、西洋音楽 (楽器) が日本で変容し、本来とは違う姿になってしまった事例については扱うことが困難になってしまう、という欠陥をもっていた。近代日本のラッパは、こうした研究領域の死角にある音楽文化で、

日本音楽研究からは「伝統的な音楽ではないから」と、西洋音楽研究からは「とるにたらない邪道なものだから」と、軽視されてきた。しかし、近年の文化研究は、文化を静的なものとして捉えるのではなく、むしろダイナミックな変容現象に注目する傾向にある。すでに、オランダの人類学者フレースは、このような視点から世界各地のオランダ植民地におけるブラスバンドの変容についての研究をしているが、19 世紀以降に急速に広まった西洋音楽は、決して均質・画一的なもの

ではなく、ローカルでは自由に変容し新しい豊かな音楽文化を形成しているという、新たな知見を発表した。

日本でも幕末維新期以来、ヨーロッパの音楽が流入し、その影響を受けてきたことは、指摘するまでもないことだが、従来の音楽研究は、どちらかという、日本人音楽家による几帳面な模倣努力の成功例を取り上げる傾向が強かった。しかし、日本の音楽文化はそれに尽きるものではない。もちろん事例の数は多くないものの、外来楽器を元のコンテクストから切り離し、自分たちの生活にふさわしいように自由に変形し——そのため、知識人や音楽エリートからは軽蔑され——、新しいコンテクストで用いようとする雑種的な事例はいくつか存在する。その典型的な例が、近年長野県と静岡県において盛んなラッパの文化である。

2. 研究の目的

本研究は、長野県および静岡県におけるラッパ文化の実態を資料調査およびフィールドワークによって、歴史的な形成プロセス、および現在の活動実態等を明らかにすることを、つまり、これまでほとんど認知されてこなかったもうひとつの日本の音楽文化を明らかにすることを目的としている。

(1) 長野県下では、民間ボランティアである消防団活動のなかにラッパ隊が制度として存在し、通信手段としての機能よりは、音楽を通じた規律訓練と団員間の親睦を目的とした活動を行っている。同時に長野県の諏訪地方では、6年毎に諏訪大社の御柱祭が実施されるが、この祭礼にもラッパが吹奏されている。おそらく諏訪大社の祭礼ラッパと消防ラッパとは何らかの相互的な影響関係があることが予想されるので、これを仮説として検証しつつ、戦後の長野県のラッパ文化の概要を把握する。

(2) 静岡県浜松市では、昔から5月の端午の節句に凧揚げを行う風習があり（現在では「浜松まつり」と称している）、そこでラッパが吹奏される習慣がある。この歴史的な由来、そして「浜松まつり」として大規模イベントに変化したのちにラッパ隊として組織され、大パレードが行われるプロセスなどを明らかにする。

3. 研究の方法

長野、静岡の両事例とも祭礼イベントと結びついているため、フィールドワークを軸として、その前後に資料収集と関係者からの聞き取り調査を行った。

フィールドワークではビデオ撮影を行い、そのレパトリー等を分析する。

(1) 長野県

2008年度

長野県消防協会主催第17回長野県消防ラッパ吹奏大会（茅野市）

長野県消防協会取材（長野県庁）

2009年度

長野県消防協会主催第18回長野県消防ラッパ吹奏大会（須坂市）

長野県消防学校ラッパ科講師市川五郎氏聞き取り調査

2010年度

諏訪大社御柱祭調査（茅野市・諏訪市）

長野県消防協会主催第19回長野県消防ラッパ吹奏大会（塩尻市）

諏訪郡消防団ラッパ隊関係者聞き取り調査（諏訪市）

通年

長野県下の図書館、国立国会図書館等で資料収集。

(2) 静岡県浜松市

ゴールデンウィーク期間の浜松における調査を軸とする。170以上の町（凧揚げ会）が参加する「浜松まつり」は大規模イベントで、全体像の把握は不可能なので、2008年は全体像を概観する予備調査を行い、翌年以降は早出町（浜松市中区）の協力によって、この地域を対象を限定し、集中的な取材を行う。早出町は浜松まつりに参加する団体の典型例ではないが、とりわけラッパの活動が盛んであることから調査対象として選択した。

2008年度 「浜松まつり」調査（包括的な実態の調査）

2009年度 「浜松まつり」調査（早出町）

2010年度 「浜松まつり」調査（早出町）

通年、早出町関係者聞き取り調査。浜松市内楽器店聞き取り調査。

4. 研究成果

資料調査および聞き取り調査等によって判明した概要は以下の通り。

(1) 長野県の消防ラッパおよび諏訪大社の御柱のラッパについて

① 明治期に導入されたラッパと、現在の消防団ラッパ隊の活動は、必ずしもダイレクトなものではなく、連続性は薄い。

各市町村史のレベルの記述では、少なくとも明治30年代以降～大正期に備品としてラッパが存在していた程度のことは稀に確認できるものの、制度的には確固としたものではない。人数も1～2人にすぎず、「ラッパ隊」

というような存在ではなかった。第二次世界大戦後になると、昭和 30 年ごろからラップ記事が増え（たとえば上田市）、豊科町には「ラップ班」が存在したことがわかる。昭和 40 年代になると、消防団のパレードや出初式についての記事のなかにも登場し、各消防団では十数人以上で編成される「ラップ隊」が設立されるようになった。昭和 50 年前後には各地でラップ吹奏大会という競技会、および講習会が開催されている。1983 年、長野消防協会は全県レベルの吹奏大会の実施にむけて教則本を編集（市川五郎）、刊行。同年第 1 回長野県消防ラップ吹奏大会が実施される。第 2 回（1985 年）以降は、消防ポンプ操法大会と同時開催され、現在に至る。

ほぼすべての消防団ラップ隊は、県大会の誕生によって、一冊の教本（曲集）に掲載されたレパートリーを習得することになり、吹奏技術の向上と標準化が実現している（それは必ずしも音楽表現の要請だけではなく、実際の統一的な消防活動や訓練の上での要請に基づく）。消防団ラップ隊、およびそのメンバーの正確な実数をつかむことはできていないが、現在のところほとんどの消防団にラップ隊が設置されている。

② 諏訪大社御柱祭

2010 年 4 月に行われた御柱祭のフィールドワーク。8 本の御柱にそれぞれ複数のラップ隊が従い、御柱運搬の「お囃子」としてラップが演奏される。曲目は先の消防ラップの曲集と重複するものが多いが、メンバーは必ずしも消防団のラップ隊員とは限らず、消防ラップとは異なる固有のレパートリーや美学をもつ団体も存在する。

資料的限界から、御柱にラップが演奏されるようになったのがいつからなのかを明らかにすることはできず、今後の課題として残った。ただし、現在のようなスタイルでラップ隊が吹奏するようになったのは、比較的近年のことではないかと推察される。

ラップは軍国主義的イメージが投影されることが多く、消防はともかく、御柱祭ではその使用を否定的に語る論調もみられる。とくに、従来の伝統的な木材運搬でうたわれた「木遣り」を保存しようとする立場からは、伝統を損なうものとしてラップは厳しく批判されている、と新聞等では読むことができる。ただし、実際の現場では、伝統的木遣りと近代のラップが敵対したり、相互に阻害したりすることはなく、木遣り唄のあとをうけて直ちにラップが鳴り響くというハイブリッド型の新しい音楽を創造しており、平和な共存関係がみられ、しかも現在のスタイルは巨大化した祭礼の運営にとって都合がよいと多くの当事者たちには認識されているよ

うに見受けられる。つまり、主に地方知識人がつくりあげる言説空間の論調は、実際に祭礼を担っている人々のムードと相当の隔りがある。

このような伝統に対する柔軟な姿勢をみせる諏訪地方では近年、消防ラップのレパートリー開発（既存楽曲のラップ用編曲）も盛んになり、消防ラップの領域内でまた別の音楽文化を創造する機運が生まれていることは特筆に値する。

(2) 静岡県浜松市

2008 年の予備的調査を経て、2009～2010 年は早出町（浜松市中区）の協力により、より詳細なレベルで凧揚げ祭りのラップの実態を調査した。

5 月の凧揚げにラップが用いられるようになったのがいつなのかについては諸説ある。演奏する曲が軍隊で用いられた「駆足行進」をもとにしていることから、軍隊起源が一般には流布しているが、明治期の消防ラップに起源をもとめる中村善太の説が妥当であろう。もっとも、明治のころから凧揚げには確かに消防のラップが使われていたが、軍隊の影響によって「駆足行進」が主要レパートリーとして統一されたと考えることも可能である。もっとも、昭和 50 年代くらいまでの凧揚げに、かならずラップ手が存在したわけではなく、存在したとしても各凧揚げ会に数名程度であったといわれている。近年、数十名からなる「ラップ隊」「子供ラップ隊」が組織されるようになったのは、おそらく昭和 55 年頃からで、凧揚げ祭りを浜松市が「浜松まつり」として都市型イベントに再編しようとした時期に一致する。初子を祝う子供のための祭礼にもかかわらず、大きな凧を揚げる作業に従事することは小さな子供には難しいため、「子供ラップ隊」を組織し、ラップを吹奏することによって参加の場を与える目的があったとも推察される。浜松市では昭和 40 年代から多くの小学校に金管バンドが設立されており（大手楽器メーカーが主導したと言われている）、子供にとって金管楽器が身近な楽器であったことも大きい。

早出町は、昭和 50 年代後半から凧揚げに参加し、それを契機にラップ隊を創設した。創設にあたってラップを指導したのは、同町に住んでいる浜松市消防団の関係者であったため、早出町ラップ隊の技術レベルは高く、他の参加町のラップ隊とは一線を画している（したがって、浜松のラップの典型的な団体とはいえない）。

早出町のレパートリーは、俗称「凧ラップ」（いわゆる「駆足行進」）だけでなく、数曲のファンファーレ、「大杯の曲」などがあり、それぞれ場面に応じて使い分けられている。約 16 名のラップ手が 2 パートにわかれてハ

ーモニーを響かせるものもある。2009年、2010年の調査では、夜間に早出町の町内を巡る「練り」に同行したが、そこで用いられるのは西洋楽器のビューグル(ラッパ)であり、演奏されるのはドミソの音楽であるが、行われている行事としては地域における初子の社会的認知という、きわめて伝統的な民俗行事であり、ラッパはもはや西洋楽器のカテゴリーを脱していることがはっきりと確認できる。

ただし、調査の過程で判明してきたことで注目すべきことは(これは長野県の事例においても共通することだが)、こうした「新しい民俗芸能」を文化として認めようとしない動向があることである。それは二つのタイプに分類できる。その一つは、祭礼の「伝統的な」スタイルに固執する保守的な人々で、西洋楽器であるラッパを「本来の祭にはふさわしくない」「日本の楽器ではない」というような言い回しで攻撃をする。もう一つは、主に西洋芸術音楽を享受する層で、こうした祭礼には参加しない人々で、たとえば、高度な音楽教育を受けたトランペット演奏などと比較して「下手だ」「音程があっていない」「品がない」「音楽を知らない」というような論調で攻撃をし、軽蔑をする。

この二つの動向は、実は本研究の「研究開始当初の背景」で述べたアカデミックな世界での「日本音楽」研究と「西洋音楽」研究の視角の問題の焼き直しであることは、言うまでもない。従来の「日本音楽」研究や「西洋音楽」研究で用いられる言説(多くはソフトで啓蒙的な言い回し)が、「新しい民俗芸能」を攻撃するための論拠を提供しているところは重要であると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①奥中康人「民俗芸能としてのラッパ文化―「音楽のまち・浜松」のもうひとつの音楽」
社団法人日本吹奏楽指導者協会『日本吹奏楽指導者協会吹奏楽紀要』第16号(2010)、21～36頁、査読なし

[学会発表] (計3件)

①奥中康人「お祭りのお囃子と西洋楽器」
民話の研究会例会(「本と人形の家」練馬区)
(2010年2月27日) 招待講演

②奥中康人「国際交流と浜松まつりのラッパ」シンポジウム「国際交流と文化」
第24回国民文化祭(静岡文化芸術大学講堂)
(2009年10月25日) 招待講演

③奥中康人「日本におけるラッパの土着化と「音楽研究」」

大阪大学 GC0「コンフリクトの人文学」研究報告(2008年7月18日) 大阪大学、講演

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥中 康人 (OKUNAKA YASUTO)
大阪大学・文学研究科・招へい研究員
研究者番号：10448722

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし